

平成30年5月31日(木)

老球の細道415号

## 5月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

寒暖の差が激しかった5月だった。毎年この頃は体調を崩すのがルーティーンだったが、今年は体調管理(身体を冷やさない)を徹底したせいか副快調(会長)に過ごせた。孫娘も幼稚園に慣れてきたせいか家での会話に、幼稚園のお友達ひよりちゃん、りさちゃん、まことくんの話が多くなり私との話は激減した。寂しい5月でもあった。

### 1・読書から

◆「高校生のスポーツの敗戦というのは、たいていは自滅型。相手は普通のことをしているのに自分たちから崩れていってしまう(岩国工業高校・ハンドボール部)」『最強部活の作り方』文芸春秋社)

全国制覇の超強豪チームといえども同じ高校生。「敵は我にあり」。弱小チームは相手チームの名前に負けてしまう。器の小さい人間は相手を過大評価し、自分を過小評価する。

### 2・テレビから

◆「生きがいとは人生を底から支えるもの。生きがいは毎瞬感じなくてはならない。人間が最も生きがいを感じるのは、自分がしたいと思うことと義務(人生の宿題)とが一致した時と思われる」〈NHK100分d e名著・神谷美恵子『いきがいについて』〉

バスケットボールのクリニックのために日々心身頭の準備をし、合間に美味しいコーヒープレイク、一日のしめにアルコール。「今日も生きていてよかった」と思える瞬間である。死ぬまでやり続けることができるだろうか?

### 3・新聞のコラム等から

◆「才能ってというのは、ものすごく好きだっていう気持ちなんじゃないか」〈朝日・折々のことば・宮下奈都〉

好きこそものの上手なれ。何ごととも好きで、楽しんでやっている人にはかなわない。バスケットボールで学んだ大切な人生の原理原則である。

◆「なんでもないことは流行に従う、重大なことは道徳に従う。芸術のことは自分に従う」〈朝日・折々のことば・小津安二郎〉

日本映画の巨匠監督は理屈にあわなくても「嫌いだからやらない」。他はゆるがせにできてもこれだけはゆずれないと。私もいつかそんな偉そうなことを言ってみたいものだ。

◆「立派な運動はいずれも、無関心、嘲笑、非難、抑圧、尊敬という五つの段階を経るものである(ガンジー)」〈朝日・『日曜に想う』より〉

非暴力抵抗を説き、理不尽とたたかい抜いた不屈の意志を示す。ガンジーを精神的に支えた詩聖タゴールも「人間の歴史は、侮辱された人間が勝利する日を、辛抱強く待っている」と説く。何事も最初は自分の思うようにはいかないがあきらめてはいけない。

◆「良いコーチとは、色々なことを知っているコーチをいうのではなくて、教えれば必ず良い結果を生み出せるコーチをいう」〈作者不詳〉

私の目標は受講生の子どもたちを1回のクリニックで変えることである。「変える」とは①今まで以上に上達した②今まで以上にバスケットが面白くなった③とても楽しかった。この3つを受講生に感じてもらって終了することである。今月はすべて失敗だった。